

ふるさと奥尻通信

令和2年3月31日
奥尻町教育委員会発行
事務局:01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

巻頭言

建設業界では、地図に残る仕事であることに誇りを感じていることでしょうか。遺跡の調査はその前段階の仕事として、その足元を支えるものです。地図には載りませんが歴史に名を刻みます。

特集 震災復興と遺跡調査

平成5年の北海道南西沖地震によって多数の被災民が発生した奥尻島。北海道と奥尻町は速やかに復興再建計画を策定し、早急な生活再建を目指しました。特に居住地については移転先を模索する中で、候補地が遺跡の範囲に重なっていたために、発掘調査を行ってからの着工となりました。複数箇所を同時に開発する計画でしたので、大変忙しい調査となりましたが、当時は現地で指揮を執る遺跡調査員が不在でしたので、難航が予想されました。

そこで、北海道教育庁文化課と近隣の町村から学芸員資格を有する職員を派遣してもらって発掘調査を行いました。2週間程度で入れ替わりながらの作業でしたので、連絡や調整、調査方法の統一、成果の統合など簡単ではなかったようです。このような被災地での遺跡調査は東日本大震災後にも盛んに行われ、各都道府県や市町村より専門職員が応援で派遣されています。奥尻はその先駆けとも言える事例でした。その後、平成8年(1996)4月より町に学芸員が採用され、遺跡調査にあたりました。以降、文化財専門職員の配置となって現在に至ります。



津波で削られた青苗砂丘(中央) 平成5年7月14日

具体的には青苗地区の海生段丘上に広がる青苗遺跡のうち、移転先の団地を造成することとした、青苗中学校横手の通称「カベ山」(カベ山遺跡→青苗遺跡C地区)と、そこから伸びる取り付け道路部分(青苗遺跡E、F地区)を発掘調査しました。その他、後の新生団地の一部(青苗遺跡A地区)と、萬徳寺再建予定地(青苗B遺跡)についても調査し、長浜海岸付近の道道の改良に伴って、長浜2遺跡の調査も連続して行われました。平成6年より4年間で約60,000㎡もの面積を調査することとなり、一気に調査成果が蓄積されていきました。遺跡調査の進展はすなわち震災復興につながったため、街の再建とともに、かつての見慣れた郷里の風景はどんどん変わっていきました。

地震津波は、青苗岬を回り込みながら青苗湾一帯に打ち寄せ、広範囲に被害を与えました。当時は湾に沿って広範囲に砂丘が発達しており、青苗中学校前では植樹することで防災林として整備してありました。襲ってきた津波は、この防災林の一部を飲み込みましたが、完全に乗り越えることはなく、砂丘背後への被害を軽減させることにつながりました。実はこの砂丘の下には6世紀～7世紀頃のオホーツク文化の遺跡が埋もれており、平成13年・14年に確認調査が行われ、人骨や島根県産の管玉など、これまで島内では未発見の資料が発掘されて注目されました。結果的にオホーツク文化伝播の南限として北海道指定史跡(平成20年指定)として保護されています。

現在に至るまで、島に生活してきた人々は、海から大きな資源を得て暮らしてきましたが、その海は時に大変厳しい試練を与え、人々は困難に直面しました。しかし、毎度のようにその困難を乗り越えて現在の暮らしがあるのだと思います。



歴史民俗資料館の被災状況 平成5年8月



青苗遺跡C地区(カベ山)の調査 平成6年



カベ山の遺跡調査後には団地が造成された



青苗砂丘遺跡から出た人骨 平成14年

